

## 注意事項

「JのPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

川崎沙希の青春ラブコメは突然始まる。

### 【作者名】

たきゅ。

### 【あらすじ】

「愛してるぜ川崎」 比企谷八幡が不意に放ったその言葉は、川崎沙希を動搖させるのには十分だった!? 川崎沙希の目線で文化祭後のアナザーストーリーを描く、新たな青春ラブコメ！ 本来かみ合うはずのなかつた二人の歯車が突如動き出し、それはやがて周りに影響を広げ始め・・・

# 秋の夜空のもと、彼と彼女の物語は動き始める。前編

総武高で過ごす一回目の秋、同じく高校生活一度目の文化祭を終え、すっかり口が落ちるのも早くなり朝と夕方は過ごしやすくなっていた。

早く買い物終わらせて帰つてあげないと大志たちがお腹空かしちゃう

店内の時計に目をやると大方夕方の六時になろうとしていた。  
川崎沙希は今日の夕食の材料を集めカゴに入れていく。

足を止めるところなく私は無意識のうちに先日の文化祭のことを見出していた・・・。

文化祭一日田ももつさわる終わろうがという時、一人教室で呆けていた私のところに彼は急にやってきて急に去つて行つた。去り際にとんでもないことを言い残して。

『愛してるぜ、川崎』

急に恥ずかしくなり我に返ると、田舎地の野菜コーナーにやつてきていた。文化祭のあの日以来私は気付くと無意識のうちに彼の言葉を思い出しては恥ずかしくなり、一人顔を赤くしていった・・・

はあ、あいつのせいだよ・・・

たくさん積まれているジャガイモの山に手を伸ばすと丁度他の人の手とぶつかつた。

「あ、すいません」そう言い終わらない内に顔を上げるとそこには

「ひ、比企谷つ！」

思わず一歩くらいバツクステップしてしまった。

「いやいや、どんだけびっくりしてんだよ？いくら俺の田が死んだ魚みたいいつもそんなにアソン引きされたらやすがの俺も傷つくんだが……」

そう、さつきまで私を無意識の内に顔を赤くさせていた張本人比企谷八幡が私の田の前に現れて、すく驚いてしまった……

は、ハズイ／＼　本人を田の前にするとまた『あのときの言葉』を思い出しそうになる・・・顔赤くなつてないかな／＼

「どうした川崎？顔真っ赤だぞ」

なつてましたあああああああああ／＼　恥ずかしすぎる  
んだけど！？

「い、いや何でもないから!!そ、それよりどうしてここに・・・？」  
「まあ、普通に買い物だよ。小町が夕食に肉じゃがを作るから材料買ってこつてメールあつたからな・・・。可愛い妹の手料理のためなら、趣味と特技が引きこもりの流石の俺も買い出しいくらに行かんとな」  
「・・・あんた本当にシスコンだねえ…。」

私は本当にここにドキドキしてたんだっけ…？

「うつせ、てかお前だつてプラコンかつシスコンだらうが」  
「いや、私は違うし…普通に姉として弟と妹を可愛がってるだけだし」「いやいや川崎さん？それを世間一般ではシスコン、プラコンって言うんですよ？」

「…あんたと一緒にされると否定したくなるのはなんでだろうね？」  
「おいら、当たり前のようにディスるんじゃねえ。雪ノ下かお前は」

ふふつ 思わず笑みがでてしまつていて「とにかく自分で気が付いた。

あれ？ 私普通に比企谷との会話を楽しんでるの！？

『氣を抜くとまた顔が赤くなりそうなので、さつきのジャガイモに手を伸ばしてカゴに入れる。

「ん？ お前んちも肉じゃがなのか？」

彼が私のカゴの中の材料をみて尋ねる。

「そりだよ、今日の夕飯は私が作ることになつてるからね。大志たち肉じゃが好きだし」

実際、美味しい美味しいと言いながら食べてくれる妹と弟を見ていると作り甲斐があるじけつぢまでもうれしくなつてくる。

「ふーん、やつぱ料理とかできるんだな。俺もたまに小町の代わりに作つたりするがあんま難しこのはできないんだよな。。」

「案外肉じゃがも簡単なもんだよ？ 最初は手間取るけど、慣れたら案外ね。私も今は一番肉じゃがが得意だよ」

あれ、なんでこんな会話してるの!? 別に料理出来るアピールじゃないよ!!!

ヒ、一人で脳内でノリツッコミをしてしまつて、ビビりやら私は動搖しているらしく・・・

「ほひ。。そんな得意なら食つてみてーぐらいだわ、・・・なんてな」

「な！」

ふえええ!!!! わりとなに言つてんのこいつ!! 見なくて  
も分かる。私は今絶対に顔が真っ赤に違いない・・・

「おー川崎? やっぱり顔赤いぞ大丈夫か?」

「もう! あんたのせいだよ!!」

「へ? お、俺!? なんで??」

もつダメ! 早く出ないと私の体力がもたないよ!!

私は頭にクエスチョンマークを浮かべる比企谷をかわしてレジに進み会計をさつさと済ませる。レジ袋に買った物を詰め込んでいくと、同じく会計を終わらした比企谷が横でレジ袋に詰め込めはじめた。

私は何だかまた恥ずかしくなつて、ほんの少し距離を離した。

「で、さつきのはなんだつたんだ川崎さんよ」

まだその話続けるの!?

「い、いや、本当に何でもないから!『気にしないで手を動かしな』  
「気にすんなつて言われたら気にするのが人間なんですがねえ・・・」

「うだうだ言いながらも、比企谷はもう言及することなく、大人しくレジ袋に商品を詰め終えてくれた。

無言ながらも一人して外に出ると秋の夜空はすっかり暗くなり、  
冷ややかな風が少しぐいていた。

月の明かりにわずかに照らされている彼を見ると、なんだかいつもよりハツキリ顔が見えるような気がした。そしていつもより意識してしまうせいだろうか。

私の瞳は少し彼を恰好良い青年のように映した。

私は少しオロつきながらも比企谷の方へ振り返り、別れの言葉を  
「おひなく口にする。

「じ、じゃあアタシ」つむだから……また……ね

「おひ、またな」

彼がそう言い終わらない内に私は帰る方向に向き直り、少し速足で歩きだした。このままだと動搖を隠せそうにないから。この胸の動悸がより速くなりそうだから。

その瞬間

「え」

私の右手にあったはずの少しばかり重いレジ袋は彼の 比企谷の手に移っていた。

「六時って言つてももつ暗いし、姉弟やら親の分の量も買ったから重いだろ……。まあ、なんだ……お、送つてくよ

「つ!!」

少しためらい、自ら顔を赤くしながらも彼の口から放たれた不意な言葉に、今度こそ私は他人から見ても分かるくらい頬を染めているだろう。まるで真っ赤な林檎のように。落ち着けようとしていた胸の鼓動はいつそ速くリズムを刻んでいく。

そして、もしかしたら私は

# 秋の夜空のもと、彼と彼女の物語は動き始める。後編

突如彼の口から放たれた言葉に私は時が止まつたかのように固まつてしまつた。いや、その彼、比企谷八幡も恥ずかしさからか同じく固まつている。

「…………」「」

無言が続く。と言つてもはたから見るとおそらく僅か10秒にも満たない程度だらう。しかし、当事者の私にとつては本当に時が止まつてしまつたのではないだらうかと錯覚してしまつほど長く感じた。

比企谷という人物はこゝに「こと」が出来るような人だつたであろうか。誤解して欲しくないけど、彼が優しくないというわけではない。むしろ彼はどちらかと言えば優しいほうだと思つ……多分。いくら部活だからといって、今まで関つたことのない私の、しかも学校外の問題であつた私の問題に対し真剣に取り組んでくれてスカラシップという解決策も教えてくれた。おかげでまた弟とも仲良く過ごせている。

だから、多分彼は不器用なだけなんだろう。何か分かるような気がする。なぜなら私、川崎沙希も凄く不器用だから……

その長く短い10秒の後、彼を見ると私が何も言わないせいでものすごくバツが悪そうな顔で固まつていた。

な、なんか言わないと！

「えつと……じゃあ。比企谷、お願ひしてもいいかな

私の言葉で、固まっていた彼は我にかえり恥ずかしそうにしながら私の横に並んだ。

「おつ……あまりにも無反応だつたからドン引きされたかと思つたわ。このまま警察に通報されるんじゃないだらうかと思つて思わずダッシュで走り去るか考えちやつたよ……」

相変わらず減らす口をたたく彼も、わずかに月明かりに照らされた顔を覗くと顔を赤くし、田があつち行きのりつち行きと泳いで明らかに動搖しているようだつた。

比企谷も恥ずかしかつただろう。普段つるんでる雪ノ下や由比ヶ浜ならともかく、なんで私にこんな心配してくれたんだろうう……

一人して歩いている時も、そつゝの氣恥ずかしさからかお互に無言が続いた。横に並んでいるナゾ、何ともいえない隙間が彼と私の間にあつた。そしてその隙間を埋めるかのように彼が持つてくれている買い物袋が歩くたびに少し曲を描れる。

あまりにも無言が続いたので私は思わず変なことを口走つていた。

「あ、あのそれ……。あんたつて彼女とか、いるの？」  
「…………は？」

「?! 何を聽いてるの私?! あまりにも唐突すぎだしいい

ほり、比企谷なんかマジで口を開けたままぽかーんとしてやつてるし…

!!

「「」「」めん!! い、い今のは忘れてっ!!!」

私はいそいで発言を撤回し冷静さを取り戻そうとする。

ホント、私今日動搖しますでしょ!? どんなだけ比企谷のこと意識してんの!??

私が一人であわあわしていると、再び歩を進め始めた比企谷が口を開く。

「……いきなりじうしたんだ。友達もいない俺になんで彼女がいるんだよ? まず友達くれよ……」

「……由比ヶ浜や雪ノ下と仲いいじゃん。友達……ではないの？」

「あいつらは……よく分からんな。同じ部活動ではあるが。」

付き合いつてないんだ……ホツ  
つてなんで私は安心してるの!? これじゃまるで……

そういうつしているうちに私の家まであと少しのところまで來ていた。私は今度は冷静に、一つの疑問を彼に投げかけた。少し前から気になっていたことだ。

「ねえ、話変わるけど。あんた文化祭終わってから大丈夫なの？」

私の問いに確かに一瞬顔を暗くしながらも、彼は何ともないよに答えた。

「……大丈夫って何がだ? 僕はいつも大丈夫ではないからよく分

からんが。」

彼はそう誤魔化した。まるで何ともないようじ。でも、私は先日見たのだ。朝、登校してきた彼が自分のシユーズを取り出そうとしたときに靴箱にゴミが入れられているのを。そして、その時の彼の顔はとても哀しい顔をしていた・・・。

どうやら文化祭の時、同じクラスメイトの相模南に対して彼が何かを言つたことが発端のようだが詳しいことはよく分からぬ。ひどい言葉を投げかけたようだが私は、彼が必要にそんなことをするとは思えない。

確かに口が悪いところはあるが、彼は人の気持ちをよく読む力がある。そんな彼がどうなるか結果が分からぬで、クラスメイトに暴言を吐くとは思えないのだ。

だからきっと彼は自分がに誹謗の矛先が向くとわかつていながらも、そんな行動をしたのではないだろうか。

と言つても私も彼のことなんて詳しいわけではない・・・。普段特に会話するわけじゃないし、塾であつてもそれは変わらない。

きっと彼女たちのほうが 雪ノ下、由比ヶ浜たちのほうが彼のことをよく知つていて、よく理解しているだらう。

「あんたがそつまつんなら何もきかないよ・・・」

言いたくないなら別に言つ必要なんてない。誰でも聞かれたくないことの一つや二つあるはずだ。

でも。

気が付くと私のアパートの前まで來ていた。

人に言いたくないようなことを、相談してくれるような関係

になれるのなら。

私は比企谷から荷物を受け取り、礼を言った。

「ありがとうね、比企谷。本当に助かったよ・・・」

「そうか、なら良かつたよ」

彼は照れ隠しなのか、手で後ろ髪を搔きながらやつ述べた。

「なら、俺も帰るな。小町にしかられりまつ」

やつ言って、自らの家に帰りつと彼は踵を返す。

「待つて比企谷!」

気が付くと私はやつ叫びながら彼の右手を掴んでいた。

「ど、どうした川崎!?」

「・・・じゃダメかな」

「・・・え?」

もつと彼のことをよく知りたい、雪ノ下たち以上に

もし、いやなことがあつたら相談してほしい、私に

だから、さきほど友達も彼女もいないとやつ叫んだ彼に対して私は無意識の内だらうか。いや、違う完全なる私の意志で言葉を述べていた。

「わ、私と友達になつて・・・!」

やつして、私たちの歯車は動き始める。

2話 end

そして、彼と私は友達になる。

キンコーンカーンコーン。授業の終わりを告げる鐘が教室内に響き渡る。

文化祭も体育祭も終わった私たち高校一年生は祭りごとが終わり、多少落ち着きを取り戻したかというとそういうわけでもない。まあ国立の大学を目指す私にとってはもうちょっと教室内の雰囲気も進学校らしく勉強しやすい感じになってくれれば嬉しいんだけど、その願いが叶うのはもっと先になるだろう。というのも、クラスメイトたちが何にこんなにそわそわしているのかというと来週なのだ。来年受験生となる私たち高校一年生最後の楽しみとも言つべきイベント ト そう、修学旅行。

そういうことで二日は皆この行きたいあそこも行きたいと、修学旅行のプランを立てるのに必死なんだ。ちなみに私たちは京都に行くことになった。

まあご存じの通り私は特段仲良くしている生徒といつのもおらず、自由行動の班もまだ決まっていない。（ちなみに文化祭のあと、なぜか海老名がやたらと懐いてきたのだが彼女はいつも女王様御一行と行動するので自由行動は一緒に行くことはない）

まあ、班が決まってないのはもう一人いるんだけどね、

そのクラス内のもう一人のぼつち、彼 比企谷八幡に目を向けると退屈そうに欠伸をしながら帰る準備をしている最中だった。

私と友達になつて

あの夜、いきなり友達宣言してしまつたのがあの後自分で恥ずか

しくなり、比企谷が突然の私の謎の宣言に混乱しておどついている中、アパートにダッシュで帰ってしまった。。

そしてあの日以来（と軽くともあれからまだ三日しかたってないけど）比企谷と会話もなく、まるで何もなかつたかのように時が流れていた。

だけど、私は決めていたんだ。今日は奉仕部が休みらしいところを耳に入れたのでチャンスは今日しかないと思っていた。

比企谷が教室を氣だるげに去るのを視界に入れ私も席を立ち、気付かないようすに彼から1~2メートルくらい離れて昇降口まで下りていく。彼が下駄箱から靴を取り出し、校内用シューズと履き替える。

「いまだ！」

「比企谷！」

「！・・・川崎か、どうした？」

平然を装つていてるように素氣ない返事を返す比企谷だが、明らかに少し落ち着きがない。・・・まあ、もちろん私もソワソワしているのだがそこはスルーで。

少し恥ずかしいけど、勇氣出せ、私。

「えっと、ちょっと一緒に帰らない・・・？」

明らかに比企谷は渋々であったけど、了承した彼が駐輪場から自転車を持ってくるのを校門前で待っていた。ちなみに私は先日自転車が故障したので最近は徒歩かバスで通学している。

「ど、どんな会話すればいいんだり？  
とりあえず、修学旅行のことかな・・・」

そんなことに頭を巡らせていると彼の声が聞こえた。

「またせたな・・・」

「あ、・・・うん」

「とつあえず、校門でようぜ。・・・」ほ人が多すぎるので

下校時刻となつたこの時間は部活をやつていない帰宅生徒も多く、確かに一日につきやすい場所だった。

それは私も同じ考えだった。というのも私たちぼっちは何か人が多いところやざわざわしているような場所は苦手だ。よく分からなければ、多分全国のぼっちはさん共通なのである。

私たちはしばらく歩を進め、ようやく落ち着いた場所に出た。信号機が赤に変わり一人同時に歩を止めたところで彼が口を開いた。

「で、どうしたんだ？ 珍しいこともあるもんだな

「え、いやその・・・」

「うーん、やっぱり少し恥ずかしいね。」

でも！

「・・・修学旅行の自由行動、一緒にまわらない？・・・なんて

「・・・は？」

彼は口を開けたまま、硬直した。何かついこの間も同じよつな比企谷のぽかーんとした顔を見た気がするけど、デジャヴ？

「だれか一緒にまわる人、いた・・・？」

私が再び質問すると彼の硬直がよつやく解ける。

「いや、いねえナジよ・・・。俺ぼっちだし」「な、な、な、こ、こ、よ、ね？」

しかし、彼は首を縦に振らな。

「海老名はとにかくとまわればいいじゃねえか。最近仲いいんだから？」

「海老名は二浦たちとまわるし・・・」

「それもそつか・・・」

なんかこいつ、遠回しに私をさけてない？

むう・・・少しイジワルしてやるつ  
少し恥ずかしいながらも、上目使いで

「わ、私じゃ・・・嫌なの？」

「つ、い、こ、や、う、こ、う、わ、け、じ、や、ない、ん、で、し、ゅ、な、ど、」

「うかねまつべんだー！」歎んでるし。顔を赤くして比企谷は下を向いた。

「うかねまつべんだー！」のがここにのかね、男って

なんかの雑誌で見たあやとこスキルを披露したことで、比企谷に効果抜群といふことは分かったのだけど、うつこつことまづでもいい。まだ、肝心の答えがまだ聞けていない。

「で、どうなの・・・？」

「ど、どうして俺なんだよ・・・？」

信号が青に変わり彼が歩を進めようとした瞬間私はその間に答えた。いや、答えたなら二日前のあの日の夜、もつすでに黙っていた。

「ともだちだから」

それからお互に会話をなく、無言で歩き続けた。  
彼は私の問いをどう思つただろうか、  
彼は私の答えをどう受け取つただろうか。

隣にいるにも関わらず、聞けないことに少しもどかしさを感じながらも、私は彼の気持ちがよく分かつた。おそらく彼は以前、友達関係などで嫌な出来事があつたんだろう。

だから信じ切ることができない。だって彼はあるの夜由比ヶ浜たちを友達ではないといつたのも、普通の人から見るとハテナだろう。はたからみると明らかに彼らの関係は友達のように見える。それに、同じクラスの戸塚、そして・・・ざ、材木？みたいなのも友達と彼は呼ばない。

友達になつてしまえば、裏切られたときがつらこから。彼はもしかしたらそのように思つてゐるのかもしれない。

でも、それは間違いだ。もしそのようになるのだとしたらその友達は『本物』ではない。それはクラスメイトたちがよくやつている薄っぺらい関係、社交辞令のよつな、レプリカのよつな。  
だから、私もかれもそのような関係は望まないんだ。  
なら、答えは一つしかない。

私は彼と『本物』の関係を築きたい

分かれ道まで來たがまだ彼は答えてくれなかつた。

「どうがな、かな。また今度誘うしかないね・・・

「私こっちだから、じゃあ

私が彼に別れを告げようとした時だった。彼のほうを見ると彼もこちらを見ていた。

「じゃあ、どこ行くとか……相談したいし……よかつたらメールアドレス教えてくれないか？」

「え？」

「……と、友達なんだろ」

夕日が眩しく差し彼の表情を詳しく見ることはできなかつたけど、彼が多分顔を赤くして、一步を踏み出してくれたことは理解できた。それだけで十分だつた。

私は彼の勇気（こたえ）に力いっぱい答えた。

「うん！」

そうして、彼と私は、友達になつた。

3話 end